

# 会計学のイデオロギー分析に向けて

——Eagleton [2007] によるイデオロギーの定義と戦略を通じて——

中 村 恒 彦

## 1. はじめに

会計学の本質とはいかなるものであろうか。過去、多くの研究が会計を「文化」「企業の言語」「利害調整」「有用な情報」などと定義してきた。そこには、研究視点の違いはあるけれど、科学の法則を見つけるために終始してきたのではないだろうか。しかしながら、会計学も社会科学であり、その対象が人間の行動であるがゆえに、ゆるぎない法則を見出すのは難しい<sup>1)</sup>。なぜなら、ある法則が発見されたとしても、あるものは「一時的な泡沫<sup>2)</sup>」に終わり、あるものは「千変万化をも辞する<sup>3)</sup>」ことをいとわない。その結果、「虚偽」でも「真実」になりうるし、「真実」も「虚偽」となりうる。

だが、我々はここで気づかなければならない。もし「泡沫」や「千変万化」そのものが法則であればどうなるのであろうか。もし近代会計学と批判会計

---

1) Sunder [2010] によれば、社会科学について次のような説明をしている。Social は、研究対象が「感情のある存在」を認識しており、Science は、「永遠の法則」を追求する。したがって、自然科学も人文科学も人間行為の法則性をほとんど認めない。しかし、社会科学は、その二つを両立させ、人間行為の法則性を求めることになる。また、Sunder は、社会科学の法則について次のように述べている。社会科学の法則は、社会政策の基盤となるために、安定性をもちなければならない。しかし、人間は、学習・順応するので、社会科学の発見は、発見を無効にする傾向のある方法で行為を変更できる。そのような順応に頑強である発見が社会科学の「法則」と呼ばれ、社会政策の基礎として役立つかもしれない。

2) 片岡 [1973] 1頁

3) 宮上 [1979] 18頁

学の対立自体が法則であったらばどうであろうか。会計学における対立が概念の「真実性」と「虚偽性」に影響を与えてきたのではないだろうか。「『概念をいなく』とは、言葉を特定の方法で駆使できる能力をもつ<sup>4)</sup>」ことを示すが、我々が概念によって現実を把握しようとする、逆に現実からはなれてしまうかもしれない<sup>5)</sup>。

そのような効果は、学術的には「言説」や「言説の効果」といえるが、直感的には「言葉の魔術<sup>マジック</sup><sup>6)</sup>」といえるのかもしれない。しかしながら、我々、会計学者がそうした法則を直接的に扱うことは難しい。もし扱うことが可能であるとすれば、会計学が考える「理論の理論」や「概念の概念」、すなわち、会計学の概念観を考察することであろう。そして、その方法を<sup>イデオロギー</sup>観念学に求める。イデオロギーは、本来、「人間の観念に関する科学的研究」であったが、対象と研究方法が逆転してしまって観念の体系を意味する言葉になった<sup>7)</sup>。だからといって、イデオロギー理論を無用な虚構とするべきではない<sup>8)</sup>。North [1981; 1990] が経済史の研究で示すように、イデオロギー理論がなければ経済史の変化を説明できない<sup>9)</sup>。

4) Eagleton [2007] pp.193-194 (大橋訳 [1999] 403頁)。

5) Eagleton [2007] p.337 (大橋訳 [1999] 338頁)。「わたしたちが概念を世界の「イメージ」なり「抜き刷り」と経験論者の流儀にしたがって考える誘惑にからめとられてはじめて、わたしたちは、世界と概念との永遠の乖離に懊悩しはじめる。」

6) この言葉自体は、学部生時代に宮上理論を教示いただいていた大阪経済大学簿記会計研究部の諸先輩たちから教わった言葉である。初学者的な言葉かもしれないが、どうかご容赦いただきたい。

7) Eagleton [2007] p.63 (大橋訳 [1999] 144-145頁)。Eagleton [2007] は、「わたしたち自身の時代においてイデオロギーがおびるイメージとは、科学とまっこうから対立するものというものだろう。だから、イデオロギーがもともと科学として、つまり観念の形成と発展を支配する法則についての合理的研究として産声をあげたことを思いおこすと皮肉なものを感じてしまう (Eagleton [2007] p.64 (大橋訳 [1999] 146頁))」と述べている。

8) このことを説明するためには、Fromm の以下の言葉を引用すればよいだろう。「観念が1つの感情的な中核をもっているという事実は非常に重要なことである。なぜならそれはある文化の精神を理解するための鍵であるから (日高訳 [1951] 306頁)。」

9) North [1981; 1990] は、アイデアやイデオロギー等が制度変化の大きな要因であり、新制度派経済学はイデオロギー理論がなければ不完全であると主張する。

では、いったい我々は、イデオロギーをどのように扱えばいいのであろうか。Eagleton [2007] は、この点を基本からみつけなおした文献であり、イデオロギーの総史といっても過言ない<sup>10)</sup>。「イデオロギーに対して、不変の性格をあたえることができるかも疑わしい<sup>11)</sup>」と述べることからわかるように、実は、イデオロギー理論もイデオロギーに不変の法則を与えることができていない。それにもかかわらず、イデオロギーは、ある現象に説明を与えることができる独立した理論をもっている。

そこで、会計学がどのように概念を考えてきたのかについて、Eagleton [2007] を用いて検討したい。本稿では、この準備段階として Eagleton [2007] のイデオロギーの定義と戦略を概観して会計学との整合性を分析する。最終的には、イデオロギー理論から会計学に対する含意と問題を把握して、我々の研究目標である「経路依存<sup>12)</sup>」の研究に反映させたいと思う。

## 2. イデオロギーの定義

我々は、普段の生活の中で、イデオロギーという言葉を使うことがあるが、その意味や内容については、はっきりと定義されていることが少ない。また、その意味も相手を非難する軽蔑的な意味や政治的な意味で用いられているともいえる。したがって、イデオロギーは、真理や現実の対極にあって、虚偽や支配というイメージに重ね合わせて用いられていることが多い。

会計学においても、イデオロギーという言葉が使われることがあるが、その意味や内容については、多義かつ曖昧なものとして使われているように思

---

「イデオロギーについての、あるいはより一般的には知識社会学についての明示的な理論がなければ、現在の資源配分や歴史的変化を説明する我々の能力には、大きな欠陥が存在することになる (North [1981] p.47 (中島訳 [1988] 66頁))。]

10) 本稿では、Eagleton [2007] の翻訳は、大橋洋一訳 [1999] による1991年版の翻訳に基づいている。

11) Eagleton [2007] p.222 (大橋訳 [1999] 460頁)。

12) 経路依存は、「小さな出来事や偶然の事象の結果が解を決定し、それが支配的になると、人のある特定の経路に向かわせる (North [1990] p.94 (竹下訳 [1994] 124頁))」と定義される。

う。そこで、「イデオロギーとは何か」という問題に取り組んだ Eagleton [2007] を考察し、この定義やその戦略から進めていきたいと思う。

Eagleton [2007] は、まずイデオロギーに単一の定義に落とし込むことができないことを示唆する<sup>13)</sup>。その上で、イデオロギーの定義を考察した<sup>14)</sup>上で、6つのイデオロギーの定義へと落とし込む。これらをあえて名前をつけていくとすれば、「文化」、「世界観」、「党派的利害関係の促進と正当化」、「支配的な社会権力の活動」、「歪曲と捏造の操作」、「虚偽的あるいは欺瞞的な信念」として述べることができるであろう。この整理方法は、イデオロギーの認識論的意味と政治的意味に注目したものである。ここでいう認識論的意味とは、イデオロギーが主体に真実を語るのか、それとも虚偽を語るのかということである。政治的意味とは、イデオロギーが権力闘争や政治活動に関係しているかどうかである。

まず、第一定義から第四定義までは認識論的に中立であり、イデオロギーを肯定的にも否定的にも用いることができる。これに対して、第五定義と第六定義は、イデオロギーを虚偽的認識あるいは侮蔑的な意味としてみなしており、イデオロギーを否定的にみなしている。また、第一定義と第二定義は、イデオロギーを社会的に決定されたものや集団固有の自己表現とみなしており、対立・協調関係などの他者との関係を意識したものではない。これに対して、第三定義から第六定義までは、イデオロギーが他者との関係を前提とした政治的な意味を含んでいる。簡単にではあるが、各イデオロギーの定義について確認していきたいと思う。

## 2.1. 文化

Eagleton [2007] は、この定義を「イデオロギーとは、社会生活におい

13) Eagleton [2007] p.1 (大橋訳 [1999] 20頁)

14) イデオロギーの次のような意味について検討をおこなっている。「すでにある見解と事実を照合させる方法」や「すべては政治的である」や「ディスクールとしてのイデオロギー」や「偽りの意識」などを考察している (Eagleton [2007] pp.3-26 (大橋訳 [1999] 20-71頁)。

て観念や信念や価値観を生産する全般的な物質的なプロセスである<sup>15)</sup>」と示している。この定義の特徴は、認識論的にも政治的にも中立的であって<sup>16)</sup>、多くの場合、観念が社会的に決定されていることを示す<sup>17)</sup>。それゆえ、イデオロギーは、「文化」に近く、「特定の社会のなかで複雑にからまりあっているところの意味作用の実践と象徴作用の過程の総体をしめすことになる<sup>18)</sup>。」

しかしながら、Eagleton [2007] は、このイデオロギーの問題点を次のように示している。すなわち、このイデオロギーの定義は、①諸個人の社会的慣習実践そのものを示していない<sup>19)</sup>、②特定の角度から領域を照射していない点を指摘する<sup>20)</sup>。逆にいえば、イデオロギーは、社会的慣習実践を示し、政治的な意味をもっているといえる。したがって、イデオロギーは、行動を志向する傾向をもち、それが政治的な意味をもつ側面があるということであろう。

## 2.2. 世界観

Eagleton [2007] は、この定義を「社会的に意味ぶかい特定の集団もしくは階級に固有の状況や生活経験に対し、象徴的な意味を与えるような観念や信念（その真偽のいかんにかかわらず）であり、「世界観」という考え方に近いことを指摘する<sup>21)</sup>。この場合、イデオロギーは、社会的に決定され

15) Eagleton [2007] p.28 (大橋訳 [1999] 76頁).

16) Eagleton [2007] p.28 (大橋訳 [1999] 77頁).「このような定義は、政治的にも認識論的にも中立であって、広い意味でいうところの『文化』にちかい。」

17) Eagleton [2007] p.28 (大橋訳 [1999] 77頁).

18) Eagleton [2007] p.28 (大橋訳 [1999] 76頁).「また、ここでいうイデオロギーは、社会的慣習実践を個人個人がいかにして『生きる』かをしめすものであって、社会的慣習実践そのものをしめしていない。」

19) Eagleton [2007] p.28 (大橋訳 [1999] 76頁).

20) Eagleton [2007] pp.28-29 (大橋訳 [1999] 77頁).「イデオロギーは、記号と政治権力の過程を軸としている。イデオロギーは『文化』という一般的領域と共存するのではなく、ある特定の角度からその領域を照射するのである。」

21) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 77頁).ただし、Eagleton [2007] は、次のように世界観とイデオロギーの違いを明らかにしている。「世界観は、ふつう死のもつ意味とか、宇宙における人間の位置といった根源的なことがらにかかわるのに対し、イデオロギーは郵便受けにどういう色を塗るのかといった問題ま

たものではなく、特定の集団や階級に固有の自己表現の一種として考えることができる<sup>22)</sup>。

しかしながら、Eagleton [2007] は、このイデオロギーの問題点を次のように示している。すなわち、「イデオロギーを特定の集団の象徴的な自己表現の一種とみるだけでは、イデオロギーを関係的な観点あるいは闘争的な観点からみたことにはならない<sup>23)</sup>。」逆に言えば、イデオロギーは、2者以上の協調・対立関係などの観点から照射するということになる。

### 2.3. 党派の利害関係の促進と正当化

Eagleton [2007] は、この定義を「社会集団が、それと敵対する社会集団の利益に対抗して、みずからの利益を<促進>し<正当化>することである<sup>24)</sup>」と示している。当該定義以下は、イデオロギーの政治的側面を強調するものとなり、支配的イデオロギーと対抗的イデオロギーという区分もできるであろう。それゆえ、イデオロギーは、「生活様式の政治的側面全体を維持するか、もしくはそれに挑戦する<sup>25)</sup>」というイデオロギー的利益をめぐる、「ディスクールの闘争の場とみることができる<sup>26)</sup>。」こうなると、イデオロギーは、文化や世界観などではなく、ディスクールの問題になるといえよう<sup>27)</sup>。

また、当該定義以下では、後述する「合理化」や「正当化」といった戦略が強調されることになる。Eagleton [2007] が述べるように、「つまりイデオロギーにおいて思弁的な認識は二の次であって、『合理化不可能な』利害

---

で触手をひろげるのである。」

22) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 77頁).

23) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 77頁).

24) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 78頁).

25) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 78頁).

26) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 78頁).

27) 「イデオロギーとは『言語』の問題ではなく、『ディスクール』の問題だということになる。・・・中略・・・イデオロギーは、ある宣言のなかに本質としてそなわっている言語上の属性などではなく、誰が、何を、何のために、誰にむかって語るかという問題と密接な関係にある。・・・中略・・・イデオロギーは、発話と、その社会的コンテクストとの関係の函数なのである (Eagleton [2007] p.9 (大橋訳 [1999] 37頁)。)」

や欲望を維持することが優先されるのである。・・・中略・・・ここでいうイデオロギーは、真偽を宣告する陳述というよりも、相手を説得する陳述、つまりレトリカルな陳述であって、『ありのまま』の状況を語ることより、政治的目的のために有益な効果を生むことのほうに重点がおかれている<sup>28)</sup>。」

しかしながら、Eagleton [2007] は、このイデオロギーの問題点を次のように示している。すなわち、「集团的利益の促進すべてが、いつもイデオロギー的と呼ばれるわけではない<sup>29)</sup>」と指摘する。すべてのイデオロギーは、必ず支配的イデオロギーと対抗的イデオロギーとの闘争として考えなければならなくなる。極論すれば、このイデオロギーは、社会集団の「イデオロギー的利益」を水平化してとらえるため、逆に骨抜きにしてしまうのかもしれない。

#### 2.4. 支配的な社会権力の活動

Eagleton [2007] は、第三定義から第四定義を次のように導いている。すなわち、イデオロギーは、「党派的利害関係の促進と正当化を依然強調しつづけることになるが、強調点を支配的な社会権力の活動だけにかぎるものである<sup>30)</sup>。」この定義は、社会集団の権力の差を意識している。第三定義では、支配的イデオロギーも対抗的イデオロギーにもその差がないと考えられていたが、第四定義では支配的イデオロギーが対抗的イデオロギーをどのようにして巻き込むかという点が焦点となる<sup>31)</sup>。

ここで注意すべきことは、第三定義も第四定義もイデオロギーの真偽に拘らないということであろう。したがって、このイデオロギーの定義では、一般的なイメージとして取り上げられるような歪曲や捏造といった操作を強調

28) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 78-79頁)。

29) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 78頁)。

30) Eagleton [2007] p.29 (大橋訳 [1999] 79頁)。

31) 「ここに含まれる前提とは、支配的なイデオロギーは支配者に都合のよいやりかたで社会構成体を統一するのに役にたつということであり、イデオロギーは、上から一方的に押しつけられた観念であるだけではなく、被支配階級や集団などを共犯関係に巻き込むものであるということである (Eagleton [2007] pp.29-30 (大橋訳 [1999] 79頁))。 」

しない点にある。これは、第三定義も第四定義も真偽の認識自体を問題にしているのではなく、2者以上の協調・対立関係などにおける陳述（ディスコース）を問題にしているからである。

しかしながら、Eagleton [2007] は、第四定義の問題点を次の第五定義とともに次のように示している。すなわち、「ここで留意すべきは、四番目と五番目の定義において、支配集団のいづく観念すべてがイデオロギー的ではないことだ。イデオロギー的ではないとはつまり支配階級がいづく観念のなかには、集団の利益をとくに促進するとはいえないものもあること、またその利益を促進するような観念のなかにも、歪曲の操作に頼らないものもあるということである<sup>32)</sup>。」

## 2.5. 歪曲と捏造の操作

Eagleton [2007] は、第四定義から第五定義を次のように導く。すなわち、「イデオロギーによって記号化される観念や信念は、支配的な集団もしくは階級の利益の正当化に役に立つのだが、その場合、とりわけ歪曲と捏造の操作が大きくものをいう<sup>33)</sup>。」ここでいうイデオロギーが「虚偽意識」であるといっても過言ないであろう。Marx 主義にみられるように、支配階級のイデオロギーは、自己の利益を正当化するために歪曲や捏造といった操作をおこなうことを強調する<sup>34)</sup>。それゆえ、観念や概念は、虚偽意識による歪曲・捏造しかもたらさないという議論が生まれるであろう。

しかしながら、Eagleton [2007] は、第五定義の問題については、次のように述べている。「そしてまたさらに留意すべきは、この五番目の定義では、政治的にみて反体制的なディスコースをどう呼ぶべきかわかりにくいこ

32) Eagleton [2007] p.30 (大橋訳 [1999] 79頁)

33) Eagleton [2007] p.30 (大橋訳 [1999] 79頁)

34) Eagleton [2007] は、「ドイツイデオロギー」から2重の意味を抽出している。1つは、「現実から遊離し、現実を隠蔽する偽りの意識としての観念（虚偽意識）」であり、もう1つは「支配階級の道具としての観念（社会階級の知的武器庫）」である（Eagleton [2007] pp.79-80, 90 (大橋訳 [1999] 177, 197頁)）。この二つが混じり合うことで、第五定義が導かれているのではないかと考えられる。



とである。従属集団や従属階級が、みずからの利益を促進したり正当化しようとするときも、現実的な利益を『自然化』し普及化し曖昧めかしたりする戦略を駆使するのであって、この点で、反体制的なディスクールも支配的なディスクールと同じであるからだ<sup>35)</sup>。」

## 2.6. 虚偽的あるいは欺瞞的な信念

Eagleton [2007] は、第五定義から第六定義を次のように導いている。すなわち、「この定義で強調されるのも、虚偽的あるいは欺瞞的な信念の存在だが、ここではそのような信念を、支配階級の利益からではなく社会全体の物質的構造から生じるものとみなすことになる<sup>36)</sup>。」この定義になると、イデオロギーは、階級や社会集団から発生するものではなく、資本主義や民主主義などの社会構造のなかに書き込まれているのである<sup>37)</sup>。

したがって、イデオロギーは、階級意識や集団意識の問題に限定されることはなく、資本主義社会における経済活動などに繋がっていく<sup>38)</sup>。この場合の虚偽意識は、「ものごとをあるがままにみない問題」ではなく、「欺瞞的・偽装的な現実」を引き起こすものと解釈される<sup>39)</sup>。代表的なものとしては、『資本論』の第一巻「商品のフェティシユ的性格とその秘密」であり<sup>40)</sup>、イ

35) Eagleton [2007] p.30 (大橋訳 [1999] 79-80頁)

36) Eagleton [2007] p.30 (大橋訳 [1999] 80頁)

37) 「イデオロギーという用語の悪い意味はそのまま残っているが、イデオロギーの発生因に階級をもちだすやりかたは回避される。このようなイデオロギー観のなかでもっとも名高いのが、いずれみることになるが、マルクスの商品フェティシズム理論である (Eagleton [2007] p.30 (大橋訳 [1999] 80頁))。』

38) Eagleton [2007] p.85 (大橋訳 [1999] 187頁)

39) Eagleton [2007] p.87 (大橋訳 [1999] 190頁)

40) Eagleton [2007] は、以下のように説明している。「人間は生産物を成型するが、生産品はやがて人間のコントロールをすり抜けるようになり、逆に、人間の存在状況を規制しにかかる。株式市場でのごくわずかな変動が、何千人もの解雇を意味することだってありうるわけだ。この『商品』フェティシズムの力によって、現実の人間関係は、神秘的なかたちで、物と物との関係となってあらわれる。ここからいくつものイデオロギー的な帰結が生まれる。最初に、これによって現実の社会のはたらきが覆い隠され、ぼかされてしまう一労働の社会的性格は、商品の流通の背後に隠され、商品のほうは、もはや社会的産物とみなされない。第二に—これは、のちのマルクス主義の流れのなかではじめてはぐくまれた観点なの

デオロギーによる歪曲や捏造といった操作は、「現実にある転倒が精神にも反映されるという問題<sup>41)</sup>」になる。この意味において、イデオロギーは、支配階級の観念という問題ではなく、資本主義の構造そのものに内在することになる。ただし、「彼らはそれを知らない。しかし彼らはそれをやっている<sup>42)</sup>」という公式からわかるように、イデオロギーは、主体が簡単にイデオロギーを見破れるようなものではなくなる。

最終的に、Eagleton [2007] は、イデオロギーを「生きられた関係」としてとらえている。そして、「イデオロギーというのは主体と権力構造のあいだに、生きられた関係をこしらえ、日常生活そのものをひそかに意味づけてしまうもの<sup>43)</sup>」と述べている。また、イデオロギーには、多くの真実が含まれること、もし含まれていないとしてもその効果が限られること、そして虚偽であったとしても不正で抑圧的な政治制度を正当化するにあたっての歪曲変形によるものであることを主張している<sup>44)</sup>。ここからいえば、偽りの記述のかわりに真実の記述を提出しても無駄であり、その錯誤の原因や機能に目を向ける必要があろう<sup>45)</sup>。それゆえ、イデオロギーとは、ディスクール効果の問題であって、その発言とその発言を成り立たせた物質的条件を権力闘争の観点からながめることになる。

---

だが一、この商品の論理によって社会は断片化してしまう。社会をまるごと全体として把握することは、以前とちがって、むづかしくなる。なぜならすべてを分子化する商品の作用があるからで、これによって社会労働という集団活動が、死せる別個の物どうしの関係に変えられてしまう。このように全体像を隠蔽する資本主義世界は、政治的批判にも傷つきにくくなる。そして、最後に、社会生命が生命のない事物によって支配されているという現実は、社会そのものに自然で不可避なものという装いをあたえてしまう (Eagleton [2007] p.84-85 (大橋訳 [1999] 186頁))。』

41) Eagleton [2007] p.85 (大橋訳 [1999] 187頁)

42) 向坂訳 [1969] 134頁；鈴木訳 [2000] 46-50頁。

43) Eagleton [2007] p.221 (大橋訳 [1999] 459頁)。

44) Eagleton [2007] p.222 (大橋訳 [1999] 459頁)。

45) Eagleton [2007] p.30 (大橋訳 [1999] 80頁)。

## 2.7. イデオロギーの定義と会計学の関係

Eagleton [2007] は、イデオロギーの概念上の混乱を解消するために書かれたものである。イデオロギーが観念学という「人間の観念に関する科学的研究を意味した」ことから考えれば、大きくかけ離れていったものになっているといえるかもしれない<sup>46)</sup>。上記の6つの定義から会計学に対する含意があるとすれば、各会計学説が会計の概念をどのように考えてきたかということであろう。いわば、会計の概念の概念（概念観）といえる。

では、会計学は、会計の概念をどのような位置づけとして考えてきたのであろうか。そして、Eagleton [2007] の定義との整合性はあるのか。まずはその概観について検討してみたい。その際、Eagleton [2007] にみられたように、概念の認識論的意味と政治的意味を念頭にして検討にしてみると、次のような概観があるのではないだろうか。

すなわち、第一定義「文化」および第二定義「世界観」は、認識論的にも政治的にも中立であり、会計学でいえば近代会計学が想定していた概念観に近い。第三定義「党派の利害関係の促進と正当化」と第四定義「支配的な社会権力の活動」は、認識論的には中立的であるが政治的意味をもっている。この立場は、ポストモダン会計学の概念観に近い。第五定義「歪曲と捏造の操作」と第六定義「虚偽的あるいは欺瞞的な信念」は、認識論的にも政治的にも批判的であり、批判会計学の概念観に近い。

各会計学説を検討すればかならずしも上記のとおりではないかもしれないが、検討の手がかりとして上記の概観を提示しておく。

### 補節 近代会計学の概念観

イデオロギー理論と批判会計学やポストモダン会計学の関係については改めて考察するので、ここではイデオロギー理論と近代会計学について若干ながら考察を加えたい。

---

46) Eagleton [2007] p.63 (大橋訳 [1999] 144頁)。

近代会計学の諸説には枚挙にいとまがないが、近代会計学における概念観は中立的なものといえる。Eagleton [2007] の第一定義を例にとれば、「会計は文化である」という考え方と結びつくであろう。国際会計研究では、会計の文化的影響が大きく取り上げられ、文化が会計の発展にとって重要であると主張されている<sup>47)</sup>。

たとえば、Gray [1988] は、社会（文化）価値から会計価値あるいは会計実務を説明するフレームワークを構築している<sup>48)</sup>。具体的には、Gray [1988] は、Hofstede（萬成・安藤監訳 [1984]；岩井・岩井訳 [1995]）の「権力の格差<sup>49)</sup>」, 「不確実回避の傾向性<sup>50)</sup>」, 「個人主義対集団主義<sup>51)</sup>」, 「男性的価値対女性的価値<sup>52)</sup>」といった社会価値あるいは「専門家主義対法定主義<sup>53)</sup>」, 「統一性対柔軟性<sup>54)</sup>」「保守主義対楽観主義<sup>55)</sup>」「秘密主義対公開主義<sup>56)</sup>」

47) 野村・平松訳 [1999] 12-13頁。

48) Gray [1988] pp.5-11.

49) 「権力格差とは、それぞれの国の制度や組織において、権力の弱い成員が、権力が不平等に分布している状態を予期し、受け入れている程度である（岩井・岩井訳 [1995] 27頁）。」

50) 「不確実性の回避は、ある文化の成員が不確実な状況や未知の状況に対して脅威を感じる程度と定義することができる。とりわけこの感情は、神経質になってストレスが高まることや、成文化された規則や慣習的な規則を定めて予測可能性を高めたいとする欲求に現れている（岩井・岩井訳 [1995] 119頁）。」

51) 「個人主義を特徴とする社会では、個人と個人の結びつきはゆるやかである。人はそれぞれ、自分自身と肉親の面倒をみればよい。集団主義を特徴とする社会では、人は生まれた時から、メンバー同志の結びつきの強い内集団に統合される。内集団に忠誠を誓うかぎり、人はその集団から生涯にわたって保護される（岩井・岩井訳 [1995] 51頁）。」

52) 「男性らしさを特徴とする社会では、社会生活の上で男女の性別役割がはっきりと分かれている（男性は自己主張が強くたくましく物質的な成功をめざすものだと考えられており、女性は男性より謙虚でやさしく生活の質に関心を払うものだと考えられている）。女性らしさを特徴とする社会では、社会生活の上で男女の性別役割が重なり合っている（男性も女性も謙虚でやさしく生活の質に関心を払うものだと考えられている）（岩井・岩井訳 [1995] 86頁）。」

53) 「強制規定および法定統制を遵守することに対して、専門的判断を行使し専門家の自己規制の維持する選好（Gray [1988] p.8）」

54) 「各企業が認識する環境にしたがう柔軟性に対して、企業間の会計実務を統一し会計実務を継続的にもちいる選好（Gray [1988] p.8）」

55) 「楽観的・自由主義的・リスク選好的アプローチに対して、将来の不確実性に対処するために慎重な測定方法を採用する選好（Gray [1988] p.8）」

といった会計価値から国際的な会計システムの相違を検討している

この場合、文化は、会計価値や会計実務を説明し、会計の発展が文化の影響を強く受けることになる。ここにみられる概念観は、Eagleton [2007]の第一定義と同じく、会計の概念が認識論的にも政治的にも中立的な立場であることを想定している。また、各国の会計は、各国において社会的に決定されているという観点を意識したものになる。

また、企業会計原則や概念フレームワークや会計教義は、会計の「世界観」を示したものであろう。たしかに「適正な期間損益計算」や「利害調整機能」や「投資家意思決定支援機能」などは利害や対立を扱っている。しかし、当該概念そのものはイデオロギー的利益を保有しないように努めている。債権者保護や株主・投資家保護という会計目的は、特定の利害関係者に言葉以上の利益を誘導する目的で作られたわけではない。

したがって、会計理論や会計制度が経営者や株主や会計学者の合理化不能な欲望や利害を合理化してはいけなのである。会計理論や会計制度などは、第二定義が示すような、経営者や株主などの特定集団の自己表現でなければならない。「適正な期間損益計算」や「利害調整機能」や「投資家意思決定支援機能」といった会計目的は、特定集団の自己表現が適切に行われることで達成しうるのである。

逆にいえば、近代会計学の概念が上記のようなイデオロギー的利益を保有していたとすれば、それは規範論としてなりたたなくなる。その場合には、対立する学派、たとえば批判会計学からの糾弾を受けることになるであろう<sup>57)</sup>。それゆえ、規範論の概念は、言葉どおりの意味しか保有してはいけなし、その言説どおりに実務化されなければならない。したがって、近代会計学の概念は、少なくとも認識論的にも政治的にも意味をもってはいけな

---

56) 「透明性が高く広く公に報告する責任のあるアプローチに対して、経営・財務に深く携わる人たちのみに経営情報の開示を限定し極秘裏に扱う選好 (Gray [1988] p.8)」

57) 実際のところ、日本についていえば、引当金や減価償却会計などが企業の資本蓄積を進めたことなどが批判されている。

ものであるといえよう。

ここで重視されるべきは、会計の概念が、①会計諸現象を横断的に首尾一貫して説明すること、②会計諸現象が社会的に決定されたことを強調することであろう。ただし、近代会計学の概念をイデオロギー理論からみた場合、ひとつ大きな前提が存在する。それは、規範論が自己表現によって自分のアイデンティティを意識する論理であって、他者や制度ましてや経済的インセンティブなどによって行動を規制するものではないことであろう。

### 3. イデオロギーの戦略

Eagleton [2007] は、イデオロギーの定義以外においても、多くの重要な示唆をおこなっている。その中でも注目すべきは、イデオロギー戦略であろう。イデオロギーは、一定の機能や役割をもち、我々の生活の中を規定する方法をもっている。Eagleton [2007] は、これをイデオロギー戦略として、6つの戦略としてまとめている。すなわち、

「意味や価値の総体、それも、特定の社会権力に関係ある利害をコード化する意味や価値の総体がイデオロギーであるという定義は、あまりに広すぎるために、これをもっと細分化する必要がある。こまかくみてゆくと、イデオロギーは、しばしば、統一化 (unifying) し、行動を志向 (action-oriented) し、合理化 (rationalizing) し、正当化 (legitimizing) し、普遍化 (universalizing) し、自然化 (naturalizing) すると考えられている<sup>58)</sup>。」

こうした戦略については、会計学においても注目を浴びることがある。特に、ポストモダン会計学や批判会計学においては、「合理化」や「正当化」という言葉が頻繁に見受けられる。いわば、ポストモダン会計学や批判会計学は、「合理化」や「正当化」が会計の概念の果たす大きな役割としてみて

---

58) Eagleton [2007] p.45 (大橋訳 [1999] 107頁)

いるからであろう。そこで、こうしたイデオロギー戦略という立場から会計の概念の使い方について検討したいと思う。

### 3.1. 統一化 (unifying)

Eagleton [2007] は、次のように統一化の戦略を説明している。「イデオロギーは、それを信奉する集団なり階級をひとつにまとめ、集団なり階級に、統一的な、ただし内的には差異をはらんだアイデンティティをあたえ、おそらくそうすることで特定の集団なり階級に対し、社会全体にある種の統一をもたらす力を与えるのだ<sup>59)</sup>」したがって、イデオロギーは、部分的には不整合ではあるが、全体としては各集団をまとめて統一させようとする力がある。

この統一化という戦略は、批判会計学だけではなく近代会計学においても用いられる戦略である。たとえば、「適正な期間損益計算」という言葉は、経営者や企業に対して適切な期間損益計算を薦めるアイデンティティを与える。また、監査人や株主に対してそのチェックや業績評価をおこなうようなアイデンティティを与える。このようにして、会計の概念は、企業会計にめぐる利害関係者に対して異なるアイデンティティを与えて、企業社会や社会全体が統一するように進める。

さらにいえば、「イデオロギーが他のイデオロギーとの関係なかで存在している<sup>60)</sup>」ので、近代会計学と批判会計学の関係自体も統一化戦略の一つかもしれない。なぜなら、「支配的なイデオロギーが成功するには・・・中略・・・ひとびとのほんものの欲求や願望や欲望をあなどることなく内部にとりこんでいなければならない<sup>61)</sup>。」そういった観点からみた場合、近代会計学と批判会計学の対立自体が会計学の統一を促していたのかもしれない。

統一化戦略は、各会計学説の前提となっている部分であろう。しかしながら、この統一化と次に述べる「行動の志向」のイデオロギー戦略が各集団を

---

59) Eagleton [2007] p.45 (大橋訳 [1999] 107頁).

60) Eagleton [2007] p.45 (大橋訳 [1999] 108頁).

61) Eagleton [2007] p.45 (大橋訳 [1999] 109頁).

規定する力が弱くなってきているのかもしれない。

### 3.2. 行動の志向 (action-oriented)

Eagleton [2007] は、次のように行動の志向の戦略を説明している。「イデオロギーは、思弁的な理論体系ではなく、むしろ、ひとを行動へと促す (action-oriented) ような信念の集合であるとしばしばみなされる。問題となる観念が、どれほど小難しい理屈をこねまわし形而上的であろうとも、イデオロギー的ディスコースはそれらを『慣習実践的』状態へと翻訳せねばならない。つまり、これは、その観念の信奉者たちに、目標なり動機なり命令なりを授けることをいう<sup>62)</sup>。」

「行動の志向」がすべてのイデオロギーに当てはまるものではないが、イデオロギーが成功する条件を示している。すなわち、イデオロギーは、実践面と理論面の両面において機能させるとともにリンクさせなければならない<sup>63)</sup>。イデオロギーは、「分析的で記述的な陳述」と「道徳的で専門的な規範」の混淆体であり、「事実に関する内容」と「道徳的な現実参加」を首尾一貫した体系にまとめることで行動を導く力を生む<sup>64)</sup>。実際のところ、イデオロギー内部にはさまざまな異なる層があり、理論的なものと行為的なものがまじりあい途切れないようになっている<sup>65)</sup>。

会計学においては、たとえば会計理論・会計制度・会計実務というレベル

62) Eagleton [2007] p.47 (大橋訳 [1999] 113頁)。

63) Eagleton [2007] p.48 (大橋訳 [1999] 113頁)。

64) Eagleton [2007] p.48 (大橋訳 [1999] 113-114頁)。

65) Eagleton [2007] p.50 (大橋訳 [1999] 118頁)。「イデオロギー編成体を研究することは、そのもっとも分節化されたレベルと、そのもっとも分節化されていないレベルとのあいだの、複雑な一連のつながり、あるいは媒介を検討することである。組織化された宗教が、ここでは例として役にたつかもしいない。こうした宗教は、高度に難解な形而学的教義から、日常生活のルーティン化した行動を支配するところの厳密に細分化された道徳的規範にいたるまで、あらゆるところに浸透している。宗教とは、人間存在に関するもっとも基本的な問いかけと、個々人の生きかたとを、すりあわせる手続きそのものである。しかも宗教は両者の乖離を合理化するような教義や儀式も含んでいる (Eagleton [2007] p.50 (大橋訳 [1999] 118頁))。』



があり、会計の概念は、各レベルにおいて成功しなければならない。たんに理論的な説明だけに終わっていても、制度や実務までに及ぶ「慣習実践的」状態とならなければ成功しないといえる。

### 3.3. 合理化 (rationalizing)

Eagleton [2007] は、次のように合理化の戦略を説明している。「イデオロギーは社会的利害関係を『表現』するのではなく、社会的利害関係を合理化 (rationalizing) すると、みなされることがある。・・・中略・・・合理化とは、その根底において、精神分析的なカテゴリーである。J・ラプランシュと J・B・ポンタリスの定義によれば、合理化とは、『真の動機が認識されていない態度や観念や感情などについて、論理的に首尾一貫しているか、倫理的に容認できる説明を、主体がしめそうとする手続き』である。イデオロギーを『合理化するもの』と呼ぶことは、その段階ですでに、イデオロギーに胡散臭い何かがあることをほのめかしている—イデオロギーは、擁護できないものを擁護しようとし、いかがわしい動機を、高尚な倫理的な用語によって糊塗しているというわけだ<sup>66)</sup>。」

したがって、合理化戦略は、社会的利害関係を合理化するものといえるわけであるが、さらに深く突き詰めれば次のことがわかる。

「合理化という観点からすれば、イデオロギーとは、批判の対象になりそうな社会的行為に対して、もっともらしい説明なり正当な理由を提示せんとする多かれ少なかれシステムティックな試みとみることができる。この種の弁明行為は真実を、他人から、そしておそらくは合理化する主体自身からも隠すことになる。もしあらゆる社会的利害を、社会学者のパレート流に、おおむね情動的で非合理的なものとみなすなら、あらゆる理論的イデオロギーは、ある種の精密な合理化、つまり非合理的、あるいは反合理的な情緒なり意見を、合理的とおぼしき信念によっ

---

66) Eagleton [2007] p.51 (大橋訳 [1999] 120-121頁)。

で置き換えたものとなる。このため合理化の構造は隠喩的である。一連の概念が、いまひとつの概念の代役となるからである<sup>67)</sup>。」

すなわち、合理化戦略からみれば、真の概念と概念の代役が存在することになる。そして、概念の代役が合理的であったとしても、真の概念は、非合理的なものであるかもしれない。批判会計学は、この点を深く追求するものであり、近代会計学が非合理的な衝動を合理的な概念で置き換えていないかどうかをチェックしていたといえる。ゆえに、合理化は、批判会計学を象徴する戦略であるが、概念（の代役）から（真の）概念を引きずり出すこと自体は他の会計学でも行われていることかもしれない。

しかしながら、近代会計学の概念がたえず「合理化」の戦略をおこなっていたわけではない。逆にいえば、批判会計学は、合理化の戦略に拘泥されすぎていたのかもしれない。その結果、批判会計学の一派は、会計の概念そのものを無意味と考へて、経済現象や利害に置き換えて考へるという極論に走ってしまったといえるのかもしれない。この点については、宮上理論の分析において改めて検討したいと思う。

### 3.4. 正当化 (legitimation)

Eagleton [2007] は、正当化戦略が合理化戦略と密接に連携していることを指摘した上で、次のように説明している。「正当化とは、支配階級が、従属階級の側に、権威の所在が支配階級にあることをすくなくとも暗黙のうちに認めさせるプロセスをいう。『合理化』と同様に正当化も、どことなくいかがわしさを漂わせ、その背後に、本来なら不法な利益を、まっとうなものにみせかけようとする欲求めいたものを暗示する<sup>68)</sup>。」

しかしながら、Eagleton [2007] は、正当化が必ずしも不純ではないことを次のように指摘する。「正当化が、利害関係者に合法性というメッキを

67) Eagleton [2007] p.52 (大橋訳 [1999] 122頁)。

68) Eagleton [2007] p.54 (大橋訳 [1999] 127頁)。

かけることを意味せず、ただたんに特定の利害関係者を広く社会全体に受け入れてもらえるように努力することを意味するだけかもしれない<sup>69)</sup>。」このことからいえば、正当化は、肯定的にも否定的にも用いることができることがわかる。特に、情報公開という現象は、中立的な正当化にあたるのかもしれない。

批判会計学は、伝統的に正当化戦略も合理化戦略ともに重視してきた。いわば、不法な利益がどのように合理化・正当化されるかという研究であるからである。ただし、批判会計学を概観した場合、Eagleton [2007] のように「合理化」と「正当化」を区分しているのではないと思われる。

### 3.5. 普遍化 (universalizing)

Eagleton [2007] は、次のように普遍化戦略を説明している。「イデオロギーが正当性を主張するのに用いる重要な方法のひとつに、みずからを<普遍化 (universalizing)>すること、みずからを『永遠のものにする』ことがあげられる。価値なり利害が、ほんとうは、ある特定の場所や特定の時代に固有のものにすぎないのに、それらを、人類全体の永遠の価値や利害にみせかけること。ここで前提とされるのは、もしこの操作をおこなわないと、イデオロギーのもつ党派的・利己的性格がめだちすぎしまい、イデオロギー全般的な受容そのものが阻害されかねないということである<sup>70)</sup>。」

ここからわかるように、合理化や正当化が共時的であるとすれば、普遍化と自然化は通時的であるといえるかもしれない。そして、普遍化は、正当化戦略の一つかもしれない。しかしながら、正当化は、支配・従属関係に注目していたが、普遍化は、それを永遠のものにするプロセスといえよう。

普遍化戦略も批判会計学が注目していたものである。通常、批判的な歴史分析は、価値や利害を特定の場所や特定の時代に還元しようとする。その上で、搾取的な社会関係などを暴いていくことになる。しかしながら、「歴史」

69) Eagleton [2007] p.54 (大橋訳 [1999] 127頁).

70) Eagleton [2007] p.56 (大橋訳 [1999] 130頁).

分析は、ある意味において「普遍化」を必然とすることも重要なことなのかもしれない。すなわち、現代の観点に立って、歴史を眺めるかぎりにおいて、現代の概念を普遍化しようとする試みになってしまう<sup>71)</sup>。批判会計学といえども、この観点から逃れることはできない。North [1981] も述べるように、新古典派経済史は経済史を「効率的な市場の発展」として描こうとするが、Marx 経済史は、「階級闘争の物語」として描こうとする<sup>72)</sup>。イデオロギー理論が虚偽意識の問題であるのに対して、歴史理論は、歴史意識の問題であるといえるのかもしれない<sup>73)</sup>。

### 3.6. 自然化 (naturalizing)

Eagleton [2007] は、次のように自然化戦略を説明している。「成功したイデオロギーはしばしば、その信念を自然なもの、自明なものとみせかける—社会の『常識』と一致させ、それ以外の信念を想像できないようにさせるのだ。・・・中略・・・社会的現実、イデオロギーによって、イデオロギーと同一の広がりしかもたないものとして定義しなおされ、実際には現実がイデオロギーを生むという真実は覆い隠される。そのかわりにイデオロギーと現実、同時に生み出されたもののように思われ、両者は表裏一体かしたものとなされる。・・・この観点からすれば、支配的なイデオロギーは、対抗的な観念を、真正面から攻撃するのではなく、それを思考されるものの境界の外側に追いやってしまえばいいのである<sup>74)</sup>。」

ここで注目すべきは、会計の概念と会計の現実も同じものと定義しなおされ、同時に生み出されたものであることが主張されることである。この結果として、ある会計の概念が生まれた歴史的な背景が隠され、そのかわりに現

71) Carr (清水訳 [1962]) にみられるように、歴史は過去と現在の対話という側面をもつ。そして、現在という観点から過去をみてしまうことにほかならないであろう。

72) North [1981] p.52 (中島訳 [1988] 73頁)。

73) 「歴史意識とは、その成熟過程を時間を通して写し出すことと定義できよう (浜林・紫田訳 [2004] 9 頁)。」

74) Eagleton [2007] p.58 (大橋訳 [1999] 135-136頁)。

在の会計常識と一致しているように見せかけられてしまう。普遍化と自然化は、批判会計学が会計の概念を批判する際に用いられてきたのではないかと考えられる。Eagleton [2007] が述べるように、「イデオロギーは歴史を『第二の自然』として凍結し、歴史を自然発生的なもの、不可避なもの、したがって変更不可能なものとして提示する<sup>75)</sup>。」批判会計学も概念の歴史性が奪われていることに注目して、近代会計学の虚偽性を指摘してきたのではないだろうか。

したがって、イデオロギーは、概念から歴史を奪って虚偽を永遠のものにしようとするので、これを批判しようとする試みとして批判会計学を定式化できるのではないだろうか。このような通時的な見方は、以下のように「脱歴史化」と「速すぎる歴史化」としてまとめることができる。

### 3.7. 脱歴史化 (dehistoricizing) と速すぎる歴史化

Eagleton [2007] は、普遍化と自然化の戦略を解説した後に、「脱歴史化」を次のような形で述べている。

「普遍化とおなじく、自然化も、イデオロギーの脱歴史化傾向の一部である。つまり、観念や信念が特定の時間や場所や社会集団に固有のものであることを、暗黙的のうちに否定するからだ<sup>76)</sup>。」

批判会計学も「脱歴史化」という現象を捉えてきたのではないかと考えられる。たとえば、真実性や保守主義は、静態論の時代から現在まで存在する計算原理のひとつである。しかしながら、その意味や重要性は、時代や地域や社会ごとに異なるにもかかわらず、我々は、それらを一緒のものとして考

75) 「これはまさしく社会生活の<物象化>であって、マルクスもこのことを、有名な商品フェティシズム論のなかで説いていたように思われる (Eagleton [2007] p.59 (大橋訳 [1999] 136頁)).」

76) Eagleton [2007] p.59 (大橋訳 [1999] 137頁).

えがちである。この時点において、概念の普遍化や自然化がすでに行われているといっても過言ではないだろう。そうしたイデオロギー手続きを弾劾することが批判会計学のアイデンティティであったのかもしれない。

このように、虚偽の普遍化が批判的な見地から弾劾されてきたわけがあるが、Žižek は、それよりももっと「狡猾な」ものとして「速すぎる歴史化」というものが存在すると述べる。

「もし速すぎる普遍化が、その歴史的かつ社会-象徴的決定からわれわれの目をそらすための似非普遍的イメージを生み出すとしたら、速すぎる歴史化はわれわれをさまざまな歴史化/象徴化を通じてつねに同じものとして回帰する現実の核にたいして盲目にするのである<sup>77)</sup>。」

簡潔に言えば、「速すぎる歴史化」は、脱歴史化とは逆である。すなわち、観念や信念が特定の時間や場所や社会集団に固有であることを主張して、現実には同じことを繰り返していることを隠してしまう。たとえば、会計学でいえば、静態論と動態論の論争を20世紀前半固有の問題として封印して、収益費用アプローチと資産負債アプローチという同じような論争を展開する。現実には同じ構図が繰り返されているかもしれないのに、人々からそのことを隠してしまうことをいう。そして、新しい局面が登場して会計の新時代が登場したような表象<sup>78)</sup>を与える。この表象こそが人を主体化するに際して重要な要素を握っているのではないだろうか<sup>79)</sup>。

もしこの二つの現象がみられるとするならば、我々は、経路依存<sup>80)</sup>という

77) 鈴木訳 [2000] 81頁。

78) Eagleton [2007] によると、Althusser のイデオロギーは、真偽を問題にするのではなく、とにかく表象するものであるということができであろう (Eagleton [2007] p.18 (大橋訳 [1999] 55頁))。

79) Althusser のイデオロギー理論では、「主体」という概念が中心的な用語になる。このような傾向は、会計学では山地理論にみられる。具体的な考察については、今後の研究にゆだねる。

80) 会計学における経路依存の適用については、中村 [2004; 2005] を参照せよ。

概念を見直す必要性に迫られる。なぜなら、「脱歴史化」と「速すぎる歴史化」は、概念の経路を断ち切ったり、概念の経路を固定してしまったりする。イデオロギーは、因果関係における無限後退の鎖を奪ってしまう可能性がある。ここで重要なことは、批判会計学のように奪われることを問題にするのではなく、奪われる原因に目を向けなければならないということである。

#### 4. おわりに

本稿では、Eagleton [2007] によるイデオロギーの定義と戦略を用いながら会計学の概念を整理してきた。この整理は、批判会計学やポストモダン会計学の概念観を一貫して考察するための準備として用意したものである。結果として、近代会計学や批判会計学やポストモダン会計学とイデオロギー理論の整合性について概観することができた。これは、Eagleton [2007] がイデオロギーの現実としての機能形態や存在形態を重視していることから可能になる。

しかしながら、それは同時に各会計学説の主張を具体的に検討したわけではない。したがって、本稿で得られた知見をもとに会計学の学説を検討する必要がある。また、本稿は、Eagleton [2007] からみえるモノを記述しただけにすぎない。それゆえ、研究方法としては、イデオロギーの定義を固定した上で各会計学説との距離や違いを記述したほうがよかったかもしれない。これらの点は、本稿および今後の研究にとっても大きな制約になると思われる。

上記のような限界はあるものの、Eagleton [2007] によるイデオロギーの定義と戦略は、批判会計学からポストモダン会計学の理論的変遷を適切に記述できるであろう。特に、宮上理論や津守理論や山地理論といった代表的な学説を整理し、会計学におけるイデオロギーの機能形態や存在形態をみい出すことができるかもしれない。そして、それは、現代の会計理論にとって必要な知見になるかもしれない。

特に、「脱歴史化」と「速すぎる歴史化」は、因果関係の鎖を奪ってしま

う可能性があり、その原因に目を向けなければならないことを示唆する。これは、我々の研究目標である経路依存に重要な示唆を与える。なぜなら、我々が経路依存と呼んでいる現象は、すでにイデオロギーによる概念操作を受けた後であるかもしれない。そして、その原因こそ現代会計学にとって必要なイデオロギーの意義が含まれているのではないだろうか。

#### [付記]

本稿の執筆に当たっては、片岡信之先生（桃山学院大学）・山地秀俊先生（神戸大学）・堀口真司先生（神戸大学）・岩崎拓也氏（神戸大学大学院院生）・川崎紘宗氏（神戸大学大学院院生）から貴重なコメントならびにアドバイスを頂いた。

#### [参考文献]

- Eagleton, Terry, [2007], *Ideology: An Introduction (New and Updated Edition)*, Verso, original edition published in 1991 by Verso（大橋洋一訳, [1999], 『イデオロギーとは何か』平凡社）.
- Gray, R., [1988], "Towards a Theory of Cultural Influence on the Development of Accounting Systems Internationally," *ABACUS*, Vol.24, No.1, pp.1-15.
- North, D. C., [1981], *Structure and Change in Economic History*, W. W. Norton & Company, Inc（中島正人訳, [1988], 『文明史の経済学』春秋社）.
- North, D. C., [1990], *Institutions, Institutional Change and Economics Performance*, Cambridge University Press（竹下公視訳, [1994], 『制度・制度変化・経済成果』晃洋書房）.
- Sunder, S., [2010], "Research for Accounting Policy", Presentation in Information, Markets and Organizations Conference at Harvard Business School (June 10-11, 2010).
- 今村仁司・三島憲一・鈴木直訳, [2005], 『資本論 第一巻（上）』筑摩書房。
- 岩井紀子・岩井八郎訳, [1995], 『多文化社会—違いを学び共存への道を探る—』有斐閣（G. Hofstede, [1991], *Culture and Organizations: Software of the Mind*, McGraw-Hill international (UK) Limited）。



- 大石桂一, [2000], 『アメリカ会計規制論』 白桃書房。
- 大塚久雄, [1966], 『社会科学の方法』 岩波新書。
- 笠井昭次, [2000], 『会計の論理』 税務経理協会。
- 笠井昭次, [2009], 『現代日本会計学批判—評論に関する類型論的検討—I』 笠井昭次先生古希記念論作集編集委員会。
- 片岡信之, [1973], 『経営経済学の基礎理論—唯物史観と経営経済学—』 千倉書房。
- 栗原百代訳, [2010], 『ポストモダンの共産主義—はじめは悲劇として, 二度めは笑劇として』 ちくま新書。
- 小林章夫訳, [2005], 『アフター・セオリー—ポストモダニズムを超えて』 筑摩書房 (Eagleton, Terry, [2003], *After Theory*.)。
- 向坂逸郎訳, [1969], 『資本論 (一)』 岩波文庫。
- 澤辺紀生, [2005], 『会計改革とリスク社会』 岩波書店。
- 篠原三郎・片岡信之, [1973], 『批判的経営学』 千倉書房。
- 清水幾太郎訳, [1962], 『歴史とはなにか』 岩波新書 (Carr, E. H., [1961], *What is History?*, The George Macaulay Trevelyan lectures delivered in the University of Cambridge)。
- 鈴木晶訳, [2000], 『イデオロギーの崇高な対象』 河出書房新社 (Žižek, S., [1989], *The Sublime Object of Ideology*, Verso)。
- 津守常弘, [2002], 『会計基準形成の論理』 森山書店。
- 中村恒彦, [2004], 「会計基準の経路依存—研究開発費会計・ソフトウェア会計を中心として—」, 『神戸大学大学院経営学研究科博士論文』。
- 中村恒彦, [2005], 「日本における研究開発費会計の経路依存」『国民経済雑誌』第192巻 第1号, 119-134頁。
- 中村萬次, [1953], 『簿記学概論』 税務経理協会。
- 中村萬次, [1969], 『会計政策論』 ミネルヴァ書房。
- 中村萬次, [1984], 「『資本主義会計学』 批判の方法」『会計学の方法』 ミネルヴァ書房, 3-22頁。
- 中村萬次, [2002], 「会計史研究の方法」『会計史断章』 萌書房, 3-17頁。
- 野村健太郎・平松一夫訳, [1999], 『国際会計入門<第4版>』 中央経済社 (Mueller, G., H. Gernon, G. Meek, [1999], *Accounting: An International Perspective*, McGraw-Hill Companies, Inc.)。
- 長谷川宏訳, [2000], 『イデオロギーとしての技術と科学』 平凡社 (Habermas, J., [1968], *Technik und Wissenschaft als >Ideology<*, edition suhrkamp.)。

- 浜林正夫・紫田千薫子訳, [2004], 『歴史の風景』大月書店 (Gaddis, J. L., [2002], *The Landscape of History—How Historians Map The Past—*, Oxford University Press)
- 平林喜博編著, [2005], 『近代会計成立史』同文館。
- 真鍋明裕, [2003], 「ドイツにおける会計基準の国際的統一化の新展開とその制度的意義—民間会計基準設定主体の正当性をめぐって—」『経済論集 (京都大学)』第171巻 第5・6号, 27-44頁。
- 萬成博・安藤文四郎, [1984], 『経営文化の国際比較—多国籍企業の中の国民性』産業能率大学出版部 (G. Hofstede, [1980], *Culture's Consequence*, SAGE Publications)。
- 宮上一男, [1955], 「国民科学としての会计学」『経営研究』17・18号, 215-233頁。
- 宮上一男, [1959], 『企業会計制度の構造』森山書店。
- 宮上一男, [1966], 『企業会計の理論』森山書店。
- 宮上一男, [1969], 『企業会計の基礎』森山書店。
- 宮上一男, [1979], 『会計学本質論』森山書店。
- 西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳 [2005] 「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置—探求のためのノート」『再生産について』平凡社, 319-378頁 (Althusser, L., [1995], *Sur La Reproduction*, Universitaires de France)。
- 日高六郎訳, [1951], 「付録 性格と社会過程」『自由からの逃走』東京創元社, 306-328頁 (Fromm, E., [1941], *Escape From Freedom*)。
- 平井俊彦訳, [1998], 「物象化とプロレタリアート」『歴史と階級意識』未来社, 5-265頁。
- 平林喜博編著, [2005], 『近代会計成立史』同文館。
- 平林喜博, [2007], 『会計史への道—一つの覚書—』関西学院大学出版会。
- 森田典正訳, [1998], 『ポストモダニズムの幻想』大月書店 (Eagleton, Terry, [1996], *The Illusions of Postmodernism*, Blackwell)。
- 山地秀俊, [1994], 『情報公開制度としての現代会計』同文館。
- 山地秀俊, [2000], 「情報公開現象分析のための方法論的基礎—大衆へのイデオロギー発信と大衆のアイデンティティ形成—」神戸大学経済経営研究所『経済経営研究年報』第50号, 89-124頁。
- 山地秀俊, [2003], 「会計学説と主体形成」神戸大学経済経営研究所『経済経営研究年報』第53号, 63-102頁。
- 山地秀俊, [2006] 「会計学と社会構築主義—ポストモダン思想は批判の基礎なりうる

- かー」『会計理論学会年報』第21号, 11-20頁。
- 山地秀俊, [2010]「今, もう一度会計の本質を考えるー歴史からのアプローチー」  
『会計』第177巻 第5号, 23-36頁。
- 山地秀俊・鈴木一水・梶原晃・松本祥直 [1994]『日本の企業会計の形成過程』中央  
経済社。
- 山田康裕, [2009], 「IASBの正当性」『会計制度の成立根拠とGAAPの現代的意義ー  
中間報告ー』日本会計学会スタディ・グループ, 31-48頁。
- 渡邊泉, [2008], 『歴史から学ぶ会計』同文館出版。

(なかむら・つねひこ／経営学部准教授／2010年9月2日受理)